

丸山先生との個人的交流―思い出と受けた刺激

講師 ヴォルフガング・ザイフェルト

みなさんこんにちは。今日はお招きいただきましてありがとうございます。ただ今、センター長の西原先生からご紹介をいただきましたように、丸山眞男先生との出会い、思い出と受けた刺激というテーマでお話したいと思います。乏しい日本語の能力をもってお話ししますが、お許しください。

さて、丸山先生との初めての出会いは、岩波新書に出版された『日本の思想』を通じてでありました。ボン大学で主専攻としてちよつと妙な学問、または制度的な形でいいますと、学科である「日本学」と、副専攻として政治学と哲学を勉強したときに、その岩波新書の中の三つのエッセーを読みました。四つ目のエッセー「近代日本の思想と文学」を読む気が、その当時はあまりありませんでした。もちろん、私の日本語の能力は初歩的レベルでしかなかったし、せいぜい半分しか解らない程度でした。それでも「日本の思想」というエッセーの内容、そしてそこで適用されているアプローチの仕方にすぐに刺激を受けま

した。現代日本の政治を政治思想という観点から研究することが私に一番興味深いものとなり、ボン大学に政治思想を教えてくれる先生がいなく、二年後フランクフルト大学に移りましたが、政治思想を勉強することのきっかけになったのは確かに丸山によって使われたそのアプローチの仕方であったと覚えています。ボン大学で「現代日本語」のコースを修了した後、フランクフルト大学で、今度は逆に主専攻として政治学を選びました。そこでの私の指導教官は政治思想史の先生であるイーリンク・フェッチャー教授でした。イーリンク・フェッチャーは西ドイツで初期マルクスの研究者として知られていて、マルブルク大学のヴォルフガング・アーベントロートというもう一つのマルクス主義の流れを代表している教授と並んで、その当時に実に珍しい存在でありました。フランクフルト学派の諸先生方も当然でしたが、講義を聞いて感動しました。フェッチャー教授は珍しい存在であったことがなぜかと言いますと、ご承知のように五〇年代、六〇年代に

西ドイツでは反共の思想は一種、国家イデオロギーとなってきていたからです。例えば六〇年代、私たち学生には、日本と違って、マルクスの著書が買える本屋さんも見つからなく、全くそういう本に触れることは出来ませんでした。そういう意味で、私のその当時の指導教官であった政治学者であるフエツチャー教授は例外的な存在でした。彼の講義、セミナーなどに特に初期マルクスの著作がよく引用され、解

釈されたことです。

そして、一九七一年、一九七二年、奨学金をもらって日本に行き、一五ヶ月間の滞在を過ごしました。東京大学に留学して「戦後日本における右翼」というちょっと妙なテーマについて日本の数人の先生にアドバイスを受けました。大学の先生よりもむしろ他の方々にも世話になりました。例えば、国会図書館の方の世話もありましたし、出版社の方々とジャーナリストの方々がさまざまなヒントを与えてくれました。私のその当時の問題関心を言いますと、つまりそれは一九七一年でしたが、戦後日本に民族派の右翼、特に極右が復活するかどうかというところがありました。日本の政治の中で、それが見逃せない勢力まで成長する可能性がどれほどであるか、研究しようと思いました。やはり西ドイツ人としては、現代ドイツの歴史がその背景にありました。というのは一九六八年、その年の総選挙で特に州レベルの選挙で、国民民主党、ドイツ語で Nationaldemokratische Partei Deutschland (NPD) というある意味で新しい政党が台頭してきた時期でした。それを観察していて、日本にも似たような現象が現れるだろうか、と

いう仮説をもって日本に研究をしに行きました。その当時、丸山眞男先生と初めてお会いしました。私のような外国人の持つそういうような問題関心に日本の政治学の先生たちは丸山先生もそうでありましたが、あまり共鳴しませんでした。戦後の所謂新右翼、日本の右翼には思想性がないのではないか、そしてそれが共鳴されなかった主要な理由であったのではないかと私は思っております。取り組む意味がないんじゃないか、とにかくドイツに帰国した後、丸山先生の『現代日本政治の思想と行動』という論文集に収録されている論文を今度は英語ではなく、日本語で読もうと思ひまして、読み始めました。と同時にすぐれた日本学者であるヴォルフガング・シャモニさんと共同で翻訳の仕事に着手しました。その最初の実は一九八八年に出版された『Denken in Japan』という題が付けられた、丸山眞男論文集のドイツ語版です。これは三つの論文、つまり「日本の思想」、「近代日本の知識人」、「『であること』と『すること』」、この三つの論文で構成されているのです。そのエッセーを初めて読んでから、ドイツ語版ができ、出版されるまでにほぼ二〇年間かかりました。その長い間に学生運動もあり、卒業と職探しもありましたが、私はどうもこの本から離れることは出来ませんでした。ところで、このドイツ語の文庫版は今でも売られていますし、ドイツにおける発行部数は、出版社の話によりますと、一〇、〇〇〇部を超えているそうです。これは日本についての学問的な、難しい、異国趣味に基づかない本としては、珍しい現象だと思っております。

ドイツ語への翻訳に際して、外国人である私が、著者の文章を本当に正しく正確に理解するかどうかという疑問に絶えず直面しているとき、丸山先生といくつかの手紙による交流、又は直接にお会いして話のできる機会がありました。例えば、ある日本語の概念の理解には、多くの場合、ドイツ語での適切な語類の最適な一語の選考決定にまで取り組む骨折りが、これは思想豊かな文章を翻訳するには必要不可欠でありますが、そういう骨折りの仕事との関連で丸山先生は、何度か協力してくださったことがあります。ちよつと興味深い例をあげてみましょう。「近代日本の知識人」という論文、これは丸山先生が一九八二年に発表しましたが、その論文、もともとスピーチだったので、その中には「国際人」という表現が出てきます。これはドイツ語にどう訳したらいいかと大変困っていました。「日本語でも国際人という言葉は奇妙な言葉だ。だがある時期からしよつちゆう使われるようになりました」と丸山先生は指摘されました。私はどうしたらいいか、と迷っていたのですが、さしあたり ein kosmopolitischer Mensch, a cosmopolitan man と訳しました。しかし丸山先生曰く、「これでは日本語の国際人の意味を言い当てていません！それどころか誤って理解されてしまいます」。私の次の提案はこうでした。Ein internationalistisch gesinnter Mensch、つまり国際主義に基づいてものを考えて行動している人間。これではないのかなあ、と考えましたけれども、当然ながら今度もまったく違っていました。最後に残ったのは丸山先生自身が提案された ein internationaler Mensch という訳であり

ました。こういうような翻訳の問題について丸山先生からいただいた手紙から少し引用させて頂きます。下記の文章は丸山先生の一九八八年の手紙からです。『ドイツ語版のページ二九頁に Ein "Kosmopolit" oder ein "Internationalist" とあり、これ（後者）は「国際人」の訳だと思っておりますが、Internationalist というちよつとも merkwürdiger Ausdruck IIメルクヴェルティガー アウストゥルック（奇妙な表現）ではないでしょうか』と丸山さんが書いていました。続けてこういふふうに書いています。『「国際人」というのは日本語としても奇妙なものにもかかわらず、「国際人の養成」とか、「国際人になるために……」といったことが、近年になって盛んに日本の新聞やマス・メディアでいわれます。「国際人」という日本語は、戦後になって発明された、極めて奇妙なコトバで、これは日本のそと（IIよそ）に国際社会がある、という私が論文でも指摘した日本人の伝統的なイメージなしには決して生まれなかつたでしょう。これを（ドイツ語の）Internationalist と訳すと、その奇妙な感じが消えるのではないか、という気がするのですが……。だって、ナシヨナリストに対してインターナシヨナリストであつてもちよつともおかしくないし、表現としてもそんなにおかしくないのではないのでしょうか。ではどう訳すか、となると、私はドイツ語の語感がよく分らないので困るのですが、ドイツ語でも奇妙な感じが出るコトバを選べばよい、と思います。Der internationale Mensch 或は ein internationaler Mensch とでもしたらいかがでしょうか。つまりこの訳語は丸山先生の提案でした。これには私はとても驚きまし

た。なぜかという先生にはそれほどドイツ語のニュアンスが分つていたからです。ある意味ではドイツ人よりも分つています。今申し上げたような例は沢山ありました。毎回私の出した翻訳に関する質問に、丸山先生はいつも非常に丹念に正確に答えてくださいました。

しかし、先生が答えてくださる時に近現代日本の歴史、思想史を研究している私にはもつと驚いたことがあります。それは私の国、ドイツ歴史ならびにドイツ政治思想史、特に二〇世紀についての先生の詳しい知識でした。これは一見してみると、私の中に一種の副効果をもたらしたかもしれませんが、実際にはより深い意味を持つと思います。というのは私たち外国人の日本研究者が地域研究としての日本学に従事する場合に、異国趣味の態度、又は日本の社会現象、政治などのアプローチの仕方が異国主義に陥る欠陥があります。これは心理学的に言いますと、所謂日本の美、日本の美しさと関連しているかも知れませんが、外国人の多くは日本に行ってみて様々な意味での日本の美しさを発見して、日本人の女性の美しさも発見して、ある意味での異国主義者になってしまうのです。そういう見方は現実認識を得るには危ないです。政治学をやるには一番危ないんです。そういったような過ちを冒さないために何かの対策を考えなくてははいけません。丸山先生のようなアプローチの仕方が一要素となつて自国についての不勉強さが私に意識されてきました。そして私の場合には、確かに社会科学の考え方も最初からかなりありましたが、決定的なのは、「日本の思想」などの論文に出ている丸山先生のアプローチであつて、私

の見方を冷静な見方の方へ変えてきたと思います。丸山先生は、ものを日本国内だけの視野に限定せずに外国との比較をしながら考えておられたと思います。こういう比較論という視点を入れて、諸国のそれぞれの現象の類似点と相違点を明らかにされた。

もちろん戦争直後という、史料がまだ十分に発掘されなかつた時点においては、その一部しか使えないので、丸山先生のその当時に書かれた論文の結論に問題がないわけではありません。例えば一九四六年の「超国家主義の論理と心理」に描かれたナチの指導者像には完全に賛成することが出来ません。ヒトラーの代理人であつたヘルマン・ゲーリングという独裁政権の中で非常に地位の高かつた人ですが、彼はニュールンベルクで行われた軍事裁判所で、いろいろ裁判官に質問され、回答をしながら大笑いしたと、よく書いてあります。その当時は、丸山先生もそれについて新聞の報道とかどこかで読んだようです。そのゲーリングの大笑いは一体どういうものであつたでしょうか。先ず、大笑いという裁判の前の振る舞いそれ自体は事実でした。そういう意味で丸山先生の指摘には一種の真実が入っています。これは私が偶然にその裁判から五六年たつて発見しました。つまり、二〇〇二年には、ずっとドイツに来たことになかつたりチャード・ゾンネンフェルトというアメリカ人の話が新聞に掲載された時のことです。彼はユダヤ人で青年時代をドイツで過ごし、その後アメリカへ亡命しました。ニュールンベルク裁判所に通訳者として雇われて、アメリカの国籍を取得しました。そして二〇〇二年に再びドイツを訪れたのです。少年

時代を過ぎた小さな村（旧東ドイツにある）を訪れて、自分が体験した歴史についてドイツ人に、特にドイツの若者にその当時の事情を説明しました。ドイツの高校生や様々な人たち、また新聞記者達にも、その当なぜ亡命せざるを得なかったか、そしてニュールンベルク裁判所の裁判官通訳者として何を経験したかについて話をしました。彼は丸山先生が一九四六年のごくわずかな史料に基づいて書かれたこと、つまりゲーリングの行動を見てその受けた印象をそのままに確認してしました。ただ、その行動をどう説明すればいいですか、これはゲーリングが堂々責任を取った姿勢であるか、それとも一種の無法者（アウト・ロー）として規範意識を一切持っていない決断主義者としてであるか、その説明が色々ありうると思います。日本人のファシズム研究者も指摘したように、ゲーリングの大笑いは、やはり異質なことで、彼のようなアウト・ローであると同時に決断主義者であるような政治家のタイプにしかできない、と解釈をしました。そのときの日本の政治家と軍人にはそういうタイプとその振る舞い方は見られませんが。言い換えれば、色々な史料が足りないとか、まだ出ていなかった段階にさえ、丸山先生が状況把握をされた場合、判断で間違っていない、ナチドイツの指導者の一部には特異な、ただし責任感と関係ない姿勢をつかんだと言えらると思います。

とにかく私は、ドイツ人の若い学生の一人として、日本人の学者である丸山先生からドイツについて学び得たところがありました。これは私個人の学問的姿勢に大きな影響を与えました。今、振り返って考

えてみると、二つの意味においてそうであると思います。一つは、ドイツ人として、ある日本人の学者がドイツの政治史、ドイツの政治思想史を教えてくださった、と自分は非常に控えめな、謙遜な態度をとるようになりました。つまり、自分は自分の国の歴史についてあまりよく知らなくて、外国人の学者が、私よりもよく知っているのですから、これで自分は小さくなります。いま一つはドイツ又はドイツ人の学者は、日本に対してあるいは非西洋の諸国のすべてに対して言えることと思いますが、どれほど無知であるかとよく解りました。逆に考えてみれば、ドイツの学者達の日本の政治史、日本の政治思想史についての知識がどれほど浅いか、ということですが。こういったドイツ人の大先生には、逆にあたかも自分は世界のすべてがちゃんと解るし、皆に教えることができるというような態度、傲慢で高慢な態度があります。そういうことが非常に目立ちます。それを見て、ドイツ人のその無知、ignoranceと又はarroganceと戦わなくてはいけないと決意しました。少しずつ翻訳の仕事を進めて、日本の学者についてドイツ人に伝えたいと思っております。

それからもう少し丸山先生から学び得たところについて触れたいと思っております。例えば、これは丸山先生との最後の出会いですが、一九九五年の一月月でした。丸山先生の話は次のようでした。「本当の論争があるということは、本来、よいことで、喜ばしいことです」と先生は強調されました。「自身もまさに論争相手から学んだことが多い」と言われました。少し例をあげてみます。戦後ドイツには戦前か

ら有名であったカール・シュミットという国家法学者がいましたが、悪名高い存在でした。私の専門ではないのですが、憲法や *Staatsrecht* (国家法) などを勉強していても、カール・シュミットの論文は読んでいませんでした。彼の評判があまりに悪くなってしまう、戦後は公職追放になって、大学教授の職を続けられなくなったのです。カール・シュミットは、ご存知だと思いますが、いわゆる指導者原理を国家的な立場に立って論拠づけた人で、ヒトラーが最高指導者である、それを理論づけた人でした。そういうような人の著書さえ、丸山先生は読みました。最後に出会ったとき、丸山先生は彼を「論敵」と呼んでいました。その意味は政治的には敵でも、学問的に水準の高い人であるならば、学び得るところがたしかにある。だから論敵からも学ばなければならぬ、という風に言っています。しかしかの立場や見解をだれがそれを取っているとは関係なく、思想上独立の世界を展開する力をもつ限り、「論敵」を高く評価されていたように思います。一方、自らの立場を定式化できなかった国家主義陣営の代表者たちを、先生は評価されなかった。しかし例外的な国家主義者もいます。丸山先生と最後に出会ったときに言われたのが、「北は違うよ」と。というのは北一輝は無思想の国家主義者ではなかった。このような見方をもって丸山先生はその同時代の論敵について語られました。実質のある、内容深い思想による断固で明確な見解が、追従や媚より好ましい、と先生は考えられたと思っております。それは丸山先生の立場と違っているそれをとるものであった場合でも同じでした。そのようにしての

み、真の論争を展開することができる。が、その場合前提になっているのは確かに論争の形を守る、ということですから。つまり論敵の論旨が明瞭に現れている論文を丹念に読む、そして相手と対話、あるいは討議する、ということですから。つまり、きちんと著書と論文を読んだ上で初めて討議することです。この形が守られているならば、論争相手がどんな政治的陣営に属していても問題がないはずですから。そしてカール・シュミット以外にもう一人について、そういったような話を丸山先生から聞きました。これはドイツのファシズムを批判した、保守主義者である竹山道雄という人です。『昭和の精神史』を書いた著者である竹山道雄についても丸山先生は似たような話しをしてくれました。もちろん竹山はファシストではなく、保守主義者です。しかし、ドイツについて竹山道雄から学んだところが多いと私に言ってくれました。それで、丸山先生と最後にお会いしたのは、先に申し上げましたように一九九五年の一〇月でしたけれども、長い時間話し合いました。話しの多くは、植民地支配に関する歴史認識をめぐってでありました。その話をメモしたノートをごどこかにしまっておいて、見つかりませんでしたけれども、今回の日本旅行の直前、どこかの箱から出てきました。一〇年を超えているのですけれども、そのノートを再び読むことができました。この時、私には話のテンポが速かったのですが、聞きながらメモをとり、ある程度まで聞き取ったノートに残っていますが、今でも未解決のまま、私の中に動いている話でした。結局、丸山先生のその当時の言説ですか、*Aussage* ですか、「歴史認識がとつても難し

いです。それで時代によって動いているのです」。それで先生がそのときに私に説明してくださったことは、一九〇五年までは、日露戦争が終わるところまでの歴史で、朝鮮へ影響を与えること、そして日本の支配圏に入れることは、その時代にはそれほどひどいことではなかった、ということです。私は今でも驚いています。しかし、考えてみますと、列強はみんなそうやりました。丸山先生の鋭いところだと思いますけれども、ひどくなりませんでしたのはそれ以後です。つまり、それを聞いたなら、なぜに、何を、比較的若い世代に属している私も学び得るかといいますと、時代別にその政治行動、ここでは外交ですけれども、外交の政策で、それぞれに性格の食い違いがある、その区別がある。例えば、今から振り返ってみますと、日本のその当時の植民地時代の最初の段階をちょっと大変いいにいかたちで丸山先生はこれを受け止めたらしいですけれども、ただし、少なくとも私たちに学び得ることとしては、本当に正確には時期によっていろいろな段階がある、そういうことだと思えます。その後は、まあ、朝鮮は植民地にされたし、あと満州事変があつて、上海事変があつて、そのときから「日本の外交政策として、反対しなければならぬことだ」と先生ご自身も言いましたけれども、最初の段階と、中間の段階と、あとの段階との間にそれぞれ区別をしなければなりませんということですね。まあマックス・ウェーバーはドイツ人のポーランドに対する支配について肯定的な考え方を表現しましたし、そういったようなウェーバー研究者の中で大論争になったことと、少しでも接点があるかもしれませんが、そ

ういったような問題とぶつかりました。今でも私にとつても未解決な問題だと思えます。

それからもう一つ重要なことについて学び取ったと思います。それは民主主義の問題です。これはまた西洋人の目から見れば、あたかも民主主義が制度化された政治体制であるかのように、自分の西ヨーロッパ諸国の民主制を見ているけれども、非西洋社会に民主化がどんなに進んでいるということを我々西洋人はあまり見ていません。そのところでは丸山先生は、よく日本の民主制の発展の過程について指摘して下さいました。そういうような指摘は今でも大きな意味を持っていると思います。なぜかという、一方において、いわゆる確立した民主主義、西ヨーロッパとアメリカにある、いわゆる出来上がった民主主義に大きな欠点が現れてきました。むしろ民主主義に対して逆流が流れている気がします。他方においては西洋以外の様々な社会に民主化が進んでいるという現象がはつきりとしています。丸山先生が指摘されたようにこういったような問題について、日本を見ながら、ちょうど的確に、その危険性の可能性あるいは発展性の可能性と両方を把握することは出来たと思えます。これについてもちやうど今現在に学び得るところが多いと思えます。一例だけを上げますと、トルコですね。トルコは、皆さんがご存知のように、回教徒の宗教に基づいている政党が政権を握っています。しかし、一つずつ民主化を進めているんです。ドイツ人は全然違った次元で、トルコ人を軽蔑しています。ドイツ国内での移民労働者としてのトルコ人を軽蔑しています。しか

し今、彼等の国では民主化がドイツより進んでいるのではないかとの印象を、私は、時々受けています。そういうような複数的な見方、いまちよつとあまりよく説明できない難しい問題ですけれども、そういうようななんといいますが、フレッシュな考え方で、西ヨーロッパでない諸国の社会を見たほうがいいということについて丸山先生から私は学びました。丸山先生と最後にお会いしたのは、その歴史認識をめぐっての話を聞かせていただいて、そして玄関まで送ってくださったのですが、その当時に、別れ際に先生はこついわれました。「これは個人的な話ですけれども、どれだけ長い間病気でいるか、どんなに入退院を繰り返さなくてはいけなかったかと思うと、今も生きているのが、自分にも不思議なくらいですよ、来年の九月に来られるときには、もっと細かいところまで話しましょう。私がまだ元気でいられればね。ではくれぐれもお元気で。」

以上でございました。まだ話し足りないような気もしますが、これから後は、むしろご質問にお答えするかたちにさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。

第8回 丸山眞男文庫記念講演会

丸山先生との個人的交流

— 思い出と受けた刺激 —

講師：ヴォルフガング・ザイフェルト氏

(ハイデルベルク大学 日本学教授)

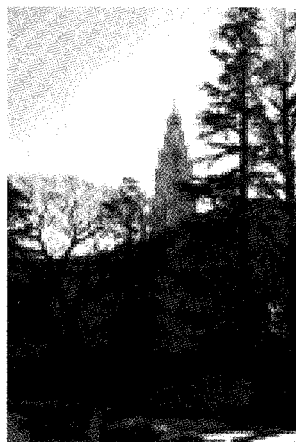
《 講演は日本語で行われます 》

2006年 7月 13日(木) 15:00~16:30

(開場 14:30)

東京女子大学 2102教室 申込不要・入場無料

東京都杉並区善福寺2-6-1 JR西荻窪駅北口から徒歩12分。吉祥寺、西荻窪からバス便にて女子大前下車。



日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、昭和の日本を代表する知識人でもありましたが、その思索の跡を伝える約二万冊の蔵書と約三万頁の手稿類が1998年に東京女子大学へ寄贈されました。

東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理の作業を開始するとともに講演会等を開催してきました。

どうぞお誘い合わせのうえご来聴下さいますよう、ご案内申し上げます。

[問合せ先] 教育研究支援課 Tel. 03-5382-6454 (直) 東京都杉並区善福寺2-6-1 URL <http://www.twcu.ac.jp>

ヴォルフガング ザイフェルト

【講師紹介】Wolfgang Seifert 氏

<略歴>

1946年生れ。政治思想史/日本近代化の政治社会学を専攻。
1974年、フランクフルト大学卒業（政治学、日本学、哲学）、翌年同大学より博士号取得（政治学）。
その後JETRO勤務などを経て、1992年からハイデルベルグ大学教授（日本学）。
1996～97年、筑波大学客員教授（日本学術振興会）。
2005年からハイデルベルグ大学・東アジア研究センター副所長。ケンブリッジ大学出版局刊行
Contemporary Japanese Society 編集顧問、ドイツ＝日本研究所運営委員。
2000年、国際交流基金 Translation Award 受賞。

<主要業績>

- 1977年 *Nationalismus im Nachkriegs-Japan. Ein Beitrag zur Ideologie der voelkischen Nationalisten.*
- 1988年 丸山眞男『日本の思想』独訳 *Denken in Japan.* (シャモニ教授と共訳)
- 1995年 丸山眞男『忠誠と反逆』独訳 *Loyalitaet und Rebellion.* (同上)
- 1997年 *Gewerkschaften in der japanischen Politik von 1970 bis 1990. Der dritte Partner?*
- 1999年 “Politisches Denken bei Maruyama Masao und Max Weber—Aspekte eines Vergleichs”.
In:W.Mommsen/W.Schwentker(Hg.), *Max Weber und das moderne Japan.*
- 2005年 竹内好「近代とは何か—日本の場合と中国の場合」など独訳 *Japan in Asien. Geschichtsdenken und Kulturkritik nach 1945.* (共訳)
- 2006年 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」など論文独訳。(近刊)

【講演要旨】

丸山眞男先生との出会い — 思い出と受けた刺激

丸山眞男先生との様々な出会いは私の歩みの中にあつたいくつかの重要なポイントと重なっている。初めての出会いは岩波新書で出版された『日本の思想』を通じてであった。ボン大学で主専攻として日本学を、副専攻として政治学と哲学を勉強した時、その新書の中の三つのエッセーを読んだ。「日本の思想」の内容及びそこで適用されているアプローチの仕方にすぐに刺激を受けた。

そして、1971年に日本に行き、戦後日本に民族派の極右が復活するかどうかという問題について調べるつもりであった。日本の政治の中でそれが見逃せない勢力となる可能性がどれほどあるだろうか、研究しようと思った。

東京大学留学中、直接に丸山先生と初めて会ったときには、「戦後の極右」は話し合いの主題にはならなかった。

続けてドイツに帰国した後に、先生の著作のドイツ語への翻訳に際し、外国人である私が著者の文章を本当に正しく理解したかどうか、という問題に直面した時、いくつかの手紙による交流があった。

日本について学ぶこと — ドイツについて学ぶこと

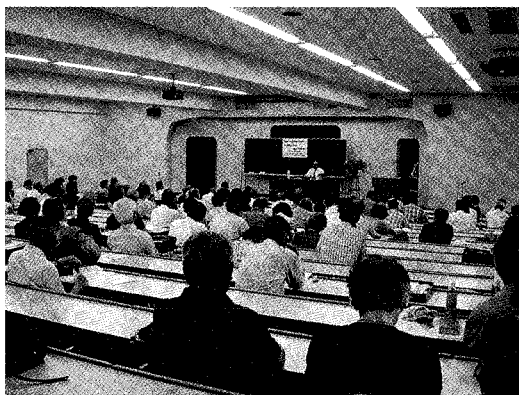
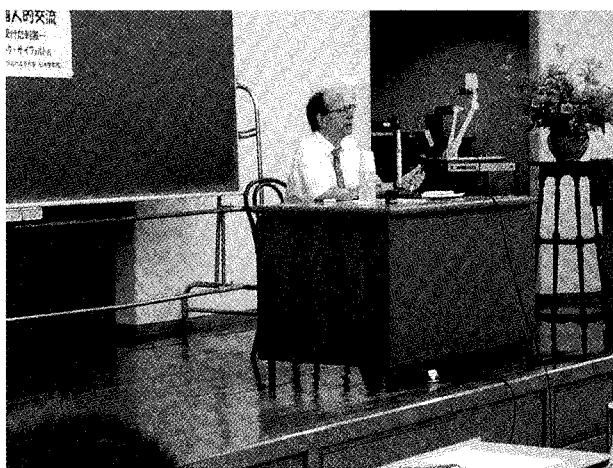
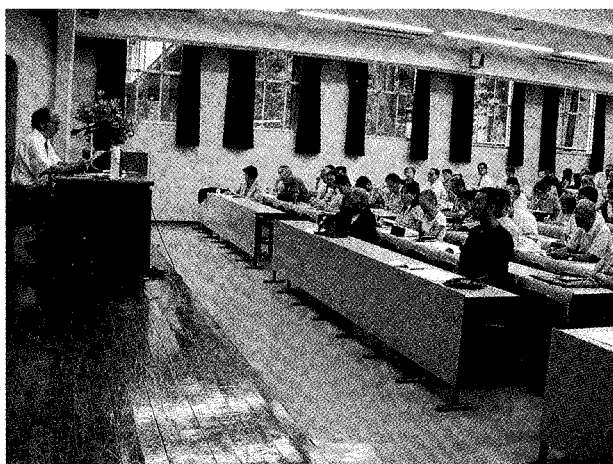
私の質問に丸山先生はいつも非常に丹念に、正確に答えて下さった。とても驚いたことはドイツ史並びにドイツ思想史（特に20世紀）についての先生の詳しい知識であった。

外国人の研究者が地域研究として日本学を進める場合、異国趣味に陥る欠陥があることを考えてみると、丸山先生のアプローチは一番の対策ではあるまいか。つまり、

- 自国である日本を深く知っていること
- 日本人論をとなえている数多い論者より、遥かに正確な知識をもっている丸山先生
- ドイツ・ナチの指導者と日本の軍人支配層との比較論の中の問題点及び刺激（「ゲーリングの笑い」）
- 政治思想の内容、系譜及び機能（特に昭和維新、民族独立運動など）
- 民主主義という政治的な立場

第8回記念講演会

「丸山先生との個人的交流—思い出と受けた刺激」講師：ヴォルフガング・ザイフェルト氏
・開催日時：2006年7月13日(木) 15:00~16:30 ・教室：2101 ・参加者：100名（懇親会参加者20名）



第八回丸山眞男文庫記念講演会についての感想（抜粋）

- ・日本人である丸山氏からドイツ人である Seifert 教授がドイツについて、また歴史（認識の問題を含めて）に関して示唆を受けたということ、感心いたしました。（五〇代・男性）
- ・とても良い講演でした。講師のザイフェルト氏にかくも大きな影響を与えた丸山眞男氏の偉大さに改めて感銘をうけました。アメリカ人ではないドイツの学者でこれほど日本に理解のある方がおられることを知って驚きました。と同時にもっともっと大切にしたい人だと思えます。（六〇代・男性）
- ・誠実なお話で、よかったです。丸山先生がけっこう植民地主義に肯定的だったというのはいさもありなと思います。先生はナシヨナリストでしたね。（六〇代・男性）
- ・丸山先生没後一〇年を経て、又丸山ブームのように本の出版がありますが、ドイツの学者がどんな「受けとめ方」をしているか大いに学習になりました。（七〇代・男性）
- ・講師は大変でしょうが、日本語講演有難うございました。ニュールンベルグ裁判、植民地支配の責任、民主主義等のテーマについてのエピソードは楽しい。（六〇代・男性）
- ・講演に参加させて頂きありがとうございました。丸山眞男先生の人となり少しわかりました。第二次大戦後の戦後処理についてドイツとの差が知りたいと思いました。（七〇代・女性）
- ・とっても良かった。丸山先生のすばらしさがより多くわかってきた。先日、岩波新書の丸山眞男を読んだばかりで、より理解度が増したようだ。（七〇代・男性）
- ・外国人の丸山評が聞けるのは大変意義深い。（五〇代・男性）
- ・良い先生である。もっと日本の若い人がこの先生に学ぶ機会があれば良いと思う。（六〇代・男性）
- ・丸山眞男先生の思想がドイツの学者に深い影響を与えたのは驚きだった。（七〇代・男性）
- ・「国際人」という変な日本語の翻訳、「植民地支配をめぐる歴史認識」、「トルコの民主主義」が極めて印象的。（七〇代・男性）
- ・非常にわかりやすいお話でした。歴史認識については、各段階によって、区分して考えなければならぬということ、とても明解に理解することが出来ました。（六〇代・女性）
- ・個人的交流というテーマが興味を持ってなかったという人がいたが、内容はそれに限らず興味深かった。（六〇代・男性）
- ・具体的例をあげて丸山眞男の思想について説明してくださって大変

面白かった。(五〇代・女性)

・いつかはこの先生のお話を聞きたいと思っておりました。そういう方のお話をきけて、よかったですと思います。(六〇代・男性)

・民主主義、民主化について、トルコ、移民の問題などに考えさせられた。(五〇代・女性)

・ドイツから見るトルコの話、etc.ザイフェルト先生の話、興味深く聞かせて頂きました。(六〇代・男性)

・今日、講演会に来る前に、半世紀も前に読んだ岩波文庫「日本の思想」を読みながら再読してみても懐かしい思いで一杯になりました。そして、ザイフェルト教授のお話に感銘しました。丸山の学問態度に対する教授の評価が実に公正です。学ぶべきことが非常に多かった。(七〇代・男性)

・日本人の日本語による講演よりも聴き易く楽しめました。ありがとうございます。今日の見点のみで過去を捉えてはいけない姿勢は、丸山先生から学びたい姿勢のひとつであります。(三〇代・男性)

・文化の違いのワク組がある中での今回のご講話でした。とくにドイツと日本とは、文学ではいいようですが、社会科学ではずいぶん困難さがあると考えさせられました。(五〇代・男性)

・広い視野に立って、物事を考えることが重要だと思いました。(七〇代・男性)

・丸山先生について外国人学者として自国のみならずドイツについても深い知識、学識を持っていられたことを感銘されたことなど、興

味深かった。(七〇代・男性)

・ドイツの民主化と日本の民主化との違いが、大変違っているというようなことが、いろいろわかってきました。ありがとうございます。(七〇代・男性)

・丸山先生についてはほとんど何も知りません。一つでも二つでも勉強して関心のある事項をみつけないという気持ちで出席しました。講師先生の話からいくつものキーワードをメモすることが出来ました。(六〇代・男性)

・世界を視野に取って思想史を構築した丸山教授を語るに相応しい講演者であったと思います。貴重な挿話を直接伺うことが出来、幸いです。(三〇代・男性)

・丸山先生との交流の中で、教わったことや、気づいたことをいくつも学ぶことができて、よかったです。ただ、日本の極右の研究者として、昨今の日本の「不寛容さ」をどう見るかも後半にあるともっとよかつたのに、とは思ふ。(五〇代・男性)

・一つ一つ明確な話し方でききやすかった。当時の学問の流れを知ることができた。丸山眞男という人をあまり知らないのだが、その思想の一部、講演者の考えがよく理解できた。(五〇代・女性)

・見事な日本語を拝聴致し、ヴォルフガング・ザイフェルト講師の丸山眞男先生物語を嬉しく感じ入りました。(八〇代・男性)

・誠に真摯で、且ユーモアあるお話を伺って、丸山先生の思想の一面にあらためて触れる思いがいたしました。(七〇代・男性)

- ・正確な知識を持っていた丸山先生を理解できました。ドイツについて学ばなくてはとも思いました。(六〇代・女性)
- ・ザイフェルト先生と丸山の個人的交流を通じて、いかに丸山思想を理解したかを知る事ができた。(七〇代・男性)
- ・解り易く大変面白かった。学ぶことがとても多かった。(七〇代・女性)
- ・丸山眞男との交流について興味深い話を伺うことが出来て、色々と参考になり大変良かったと思います。(七〇代・男性)